

昔は生活が貧しくても体験で多くを学びました。家の手伝いも我慢することも当たり前のことでした。

伸ばそう 夏休み



直接体験で 育む

子どもはみな成長と発達の大きな可能性をもっています。しかしそれは、年齢に応じた体験をしてはじめて現実のものになります。人間にはもともと五感を使って体験することで「生きる力」を育む能力が備わっているのです。

体験は学びの出発点 考え学ぶことの土台

人

は自らの体験を感覚の基盤にして思考に結びつけていきます。子ども

の学びの過程は「体験に基づく感覚→思考→実践」と言われています。ですから、体験が十分でない、学びの過程は思考の段階からいきなり始まることになり、興味や意欲が失われることになりま。このことから、体験は「学びの出発点」「思考や理解の基盤」であると言えます。子どもの成長には発達に合った体験が欠かせません。困難を乗り越える体験、何かを成し遂げる体験、人の役に立つ体験などは、子ども自身の学びにつながっていきます。間もなく夏休みも折り返し地点。家庭や地域で機会を設け、子どもたちの体験と思いを増やしてみませんか。



子どもたちが満喫している夏休み。日常生活も含めて、わたしたち家庭や地域は、子育てについてどのような視点を持つべきなのでしょう。せっかくの期間を有意義に過ごすポイントについて、子どもの体験学習に詳しい、大島まなさんにお話をうかがいました。

くら熱心な親でも家庭教育には限界があります。学校は先生も子どもたちに厳しくできず、昔よりはるかにエネルギーが必要で、学校教育も限界がきています。昔は親以外でも真剣に子どもを叱ってくれる人がいました。生活環境が劇的に変化し、遊びや生活の中の体験が貧しくなっ

子を自立へと導くのが真の親心、夏休みにトレーニングを

ている今、子どもたちは健全に育っていません。今こそ地域の受け皿が必要ですよ。

「保護」と「自立」 子を育む二つの視点

子どもを育てる親の視点は大きく二つあります。一つは「保護・守る」、もう一つは「自立・トレーニング」という視点です。わが子を守り、慈しみ、世話をするのは親として当然のこと。しかし、いつまでも子どもを守っているのは一人前になれませぬ。「まだ小学生だから」と、

「身」に付く」教育のチャンスです。ぜひ家庭や地域で、子どもに欠けている体験活動に取り組んでみてください。親ができる教育もあれば、集団の中や体験でなければ学べないことも多くあります。夏休みの企画をするときには、ぜひどこかに「自立・トレーニング」という視点を取り入れて欲しいと思います。子どもはきっと変わるはずですよ。

「体力」と「耐性」が 「生きる力」のベース

以前から「生きる力」について提唱されてきましたが、その要素はいくつかあります。「知」「徳」「体」そして「耐」です。「耐」とは耐性、すなわち我慢する力です。わたしは、この中でも「体」と「耐」が土台だと思います。今、子どもたちの基礎体力がどんどん低下し、危機的状況に

夏休みは「身に付く」 教育のチャンス

あります。親は子の知力だけを気にする傾向が強いのですが、体が弱いというのは、学力面だけにとどまらず、すべてにおいて致命的なことですよ。また、豊かさや便利さは悪いことではありませんが、昔は貧しさや不便さなど、耐えることが、工夫や我慢、手伝いなど家族の協力につながり、それが当たり前前のことでした。今はそのような生活環境がなく、教育機会に限界がある分、家庭・学校・地域が昔の人よりも意識して、あえて子どもたちにプログラムとして与える必要があります。

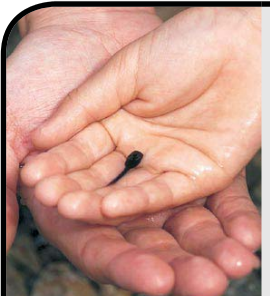
昔に比べて今は、目標の基準が低くなっています。「朝は自分で起きる」という、以前では当たり前前のことができている。自立に向けたトレーニングの一部。このような積み上げが大切です。教育には適正時期があります。今やっっておかないと大きくなってからでは取り返しがつきません。夏休みは普段できないことにも挑戦できる時です。子どもが体で覚える、文字どおり



【大島まなさん】中央教育審議会（文部科学大臣の諮問機関）で、国の教育振興基本計画を作成する特別部会の臨時委員。専門は生涯学習・社会教育論。九州女子短期大学初等教育科准教授、宗像市在住。

子の見守り方

子どもの自発性や能動性を妨げるものに「子の見守り方」が挙げられます。親の関わり方が基本的に過保護、部分的に過干渉で管理的、なのにある面では放任的という傾向があります。具体的には「自分でできることに手を出し世話をする」「安易に物を与えたり必要ないものまで用意する」「子どもの要求を安易に受け入れる」「自分ですべき決定や判断まで大人が先にしてしまう」「悲しい体験や失敗をしないようにかばう」「自発的行動を事前に抑制する」などです。心当たりはありませんか？



直接体験プログラムで 欠損体験を補う

人の社会化の過程には必ず通っておかなければならない体験があります。今の子どもたちは、自然接触・縦集団行動・自発的活動・社会参加・勤労・困難などの体験に欠ける「欠損体験」が指摘されています。その反面、テレビやインターネットを通じた間接体験や疑似体験は昔の子よりもよるかに多くなっています。しかし、画面だけを見て泳ぐことができないようになるでしょうか？子どもの生きる力を育むためには、直接体験が重要。子どもたちが自身をもつて通るしかありません。

